# 遍路

斎藤茂吉

青空文庫

那智には勝浦から馬車に乗って行った。昇り口のところに著いたときに豪雨が降って来たので、そこでしばらく休み、すっかり雨装束に準備して滝の方へ上って行った。滝は華厳よりも規模は小さいが、思ったよりも好かった。石畳の道をのぼって行くと僕は息切れがした。

さてこれから船見峠、大雲取を越えて小口の宿まで行こうとするのであるが、僕に行けるかどうかという懸念があるくらいであった。那智権現に参拝し、今度の行程について祈願をした。そこを出て来て、小さい寺の庫裡口のようなところに、「魚商人門内通行禁」と書いてあり、その側に、「うをうる人とほりぬけならん」と註してあった。

滝見屋というところで、腹をこしらえ、弁当を用意し、先達を雇っていよいよ出発したが、この山越は僕には非常に難儀なものであった。いにしえの「熊野道」であるから、石が敷いてあるが、今は全く荒廃して雑草が道を埋めてしまっている。T君は平家の盛な時の事を話し、清盛が熊野路からすぐ引返したことなども話してくれた。僕は一足ごとに汗を道におとした。それでも、山をのぼりつめて、くだりになろうというところに腰をおろして弁当を食いはじめた。道に溢れて流れている水に口づけて飲んだり、梅干の種を向うの笹藪に投げたりして、出来るだけ長く休む方が楽であった。

そこに一人の遍路が通りかかる。遍路は今日小口の宿を立って那智へ越えるのであるが、今はこういう山道を越える者などは殆ど絶えて、僕らのこの旅行などもむしろ酔興におもえるのに、遍路は実際ただひとりしてこういう道を歩くのであった。遍路をそこに呼止め、いろいろ話していると、この年老いた遍路は信濃の国諏訪郡のものであった。T君はあの辺の地理に精しいので、直ぐ遍路の村を知ることが出来た。しかしこの遍路は一生こうして諸国を遍歴してどこの国で果てるか分からぬというのではなかった。国には妻もあり子もあったが、信心のためにこうして他国の山中をも歩き、今日は那智を参拝して、追々帰国しようというのであるから前途はそう艱難ではなかった。T君は朝鮮飴一切れを出して遍路にやった。遍路はそれを押しいただき、それを食べるかと思うと、胸に懸けてある袋の中に丁寧にしまった。

僕などは、この遍路からたいへん勇気づけられたと謂っていい、そうして遂に大雲取も越えて小口の宿に著いたのであった。実際日本は末世になっても、こういう種類の人間もいるのである。遍路は無論、罪を犯して逃げまわっている者などではなかった。遍路のはいている護謨底の足袋を褒めると「どうしまして、これは草鞋よりか倍も草臥れる。ただ草鞋では金が要って敵いましねえから」というのであった。これは大正十四年八月七日のことである。

一夜明けて、僕らは小口の宿を立って小雲取の峰越をし、熊野本宮に出ようというのである。そこでまた先達を新規に雇った。川を渡ったりしてそろそろのぼりになりかけると、細い雨が降って来た。僕らはしばし休んで合羽を身に著はじめた。その時遥向うの峠を人が一人のぼって行くのが見える。やはり此方の道は今でも通る者がいるらしいなどと話合いながら息を切らし切らし上って行った。

三十分もかかって、ようやく一つの坂をのぼりつめるとそこで一段落がつく。そこに一人の遍路が休んでいた。さっきの雨が既にあがっているので遍路は茣蓙を敷いてそのうえで刻煙草を吸っていた。見晴らしが好く、雲がしきりに動いている山々も眼下になり、その間を川が流れて、そこの川原に牛のいるのなども見えている。

僕らもそこで暫時休んだ。遍路は昨日のと違って未だ若い青年である。先ほど見た一人の旅人はこの遍路であったのだから、遍路はかれこれ三十分も此処に休んでいるのであった。遍路は眼が悪いということをいった。なるほど彼の眼は一眼全く濁り、片方の瞳にも雲がかかっていた。遍路の話を聴くに、もとは大阪の職人であった。相当に腕が利いたので暮しに事を欠くということがなかったのだが、ふと眼を患って殆ど失明するまでになった。そこで慌てて大阪医科大学の療治を乞うたけれども奈何にも思わしくない、そのうち一眼はつぶれてしまった。それのみではなく、片方の眼もそろそろ見えなくなって来た。彼はせっぱつまって思い悩んだ揚句、全く浮世を棄てて神仏にすがり四国遍路を思立った。然るに、居処不定の身となり霊場を巡っているうちに、片方の眼が少しずつ見えるようになって来た。彼はますます神仏にすがって到頭四国の遍路をおえた。その時には眼がよほど好く見えるようになった。

その時彼は、もうこれぐらいで沢山である。もうそろそろ信心の方も見きりをつけて浮世の為事をして見ようと思ったそうである。そして逡巡しているうちに、眼は二たび霞んで来てもとのようになりかけたそうである。

彼は驚き心を決して二たび遍路の身になってしまった。そして既に数年を経た。きょうは小口の宿を立って熊野の方へ越えようとしているのだと、こういうのであった。

彼はそういう事を事こまかに大阪弁で話した。しかし僕は大阪弁を写生することが得手でないから、そのまま書くことが出来ない。

遍路は、けれども現在の状態に安住してはいなかった。若い身空を働きもせず、現世の慾望をも満たそうともせずにいることが残念でならなかった。彼は「いまいましい」という言葉を使った。T君は遍路に五十銭くれたが遠慮をしながら丁寧にそれをしまった。それから遍路はM君のくれた紙巻煙草を一本その場で吸った。

僕らは遍路をそこに残して一足先に出発した。一山巡って、も一つ山にさしかかろうとする頃うしろの方で鈴の音が幽かに聞こえていた。

「奴も歩き出したね」

「あの奴なかなか面白いね。ぷりぷりいっているところなんか面白いじゃないですか」

「いまいましいなんていいましたね」

「いまいましくても、遁世の実行家だね。あれだけの生活は加特利教徒の労働者なんかでは出来ないよ」

「強いられた実行なんですね」

「そうかも知れない。しかし観音力にすがるところに盲目的な強味があるとおもいますね。一時流行した覚めた人間にはああいう苦行生活は到底出来ませんよ」

「しかしみんな遁生菩提でも困りますからね」

「そうかも知れない」

僕らは疲れきって熊野本宮に著いたのは午後二時ごろであった。

そこで熊野権現に参拝した。熊野川は藍に澄んで目前を流れている。きょうの途中に、山峡からたまたま熊野川が見え出し、発動機船の鋭い音が山にこだまさせながら聞こえていたが、あれも山水に新しい気持を起させた。

この山越は僕にとっても不思議な旅で、これは全くT君の励ましによった。しかも偶然二人の遍路に会って随分と慰安を得た。なぜかというに僕は昨冬、火難に遭って以来、全く前途の光明を失っていたからである。すなわち当時の僕の感傷主義は、曇った眼一つでとぼとぼと深山幽谷を歩む一人の遍路を忘却し難かったのである。しかもそれは近代主義的遍路であったからであろうか、僕自身にもよく分からない。

# 青空文庫情報

底本：「山の旅　大正・昭和篇」岩波文庫、岩波書店
　2003（平成15）年11月14日第1刷発行
　2007（平成19）年8月6日第5刷発行
底本の親本：「時事新報」
　1928（昭和3）年2月10日～13日
初出：「時事新報」
　1928（昭和3）年2月10日～13日
入力：川山隆
校正：門田裕志
2009年6月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 遍路

斎藤茂吉

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/